

## 村上範致と著述古記録に関する基礎研究Ⅱ

佐久間 永子 鵜飼 尚代

### 一 はじめに

田原藩士村上範致のりむね〔文化五年（一八〇八）—明治五年（一八七二）〕<sup>(1)</sup>が記した古記録に「安政乙卯聞見雜録二」「安政丙辰聞見雜記三」「安政四丁巳聞見雜記四」「安政五戊午聞見雜記五」「安政六己未聞見雜記六」「万延元庚申聞見雜録七」「文久元辛酉聞見雜録八」「慶応四丁卯冬聞見録」（以後、本稿では上記八冊を「村上範致聞見雜記」という）がある。この「村上範致聞見雜記」を翻刻し、内容を考察することで、幕末における日本社会の様子や幕末から明治初における範致の位置づけを明らかにすることを目的として、平成二十八年十月に研究会（村上範致古記録研究会）が発足した。<sup>(2)</sup>

この研究会における研究成果の発表に先立ち、本論集第2号（二〇一八年）<sup>(3)</sup>に、範致の略歴・人物像およびその古記録の概要についてまとめるとともに、「村上範致聞見雜記」八冊の内「安政乙卯聞見雜録二」から「安政四丁巳聞見雜

記四」について目次項目案を作成し、記載されている情報の内容を示して範致が関心を寄せた事象について部分的だが明らかにした。しかしながら紙面の都合で基礎的情報としてもまだ不十分であったため、本稿では、拙稿「村上範致と著述古記録に関する基礎研究」の補足をしたい。本稿で補足するテーマは二点あり、一点は範致の先行研究を補足説明すること、もう一点は、「安政五戊午聞見雜記五」から「万延元庚申聞見雜録七」までの目次項目案の作成することである。

先行研究としては、砲術や兵制に関わる研究についてまとめる。目次項目案としては、本稿でも紙面の許す範囲での掲載に留まることになる。先行研究は佐久間永子が、目次項目案は鶴飼尚代が担当した。

## 二 村上範致の先行研究について

### 二一〇

本項では、範致に係る論文はもとより、資料館等において開催された砲術関連の展示にあたり発行された図説資料も含め、つとめて広く収集し、範致に係るこれまでの研究成果を、「高島流砲術」<sup>(4)</sup>「田原藩の軍事・兵制・海防政策」、前述の二つに該当しない「その他」と、簡易ではあるが、三つの分野に分けた。そして各分野における範致の評価から、範致像をまとめた。各先行研究の内容については、紙面の関係上、簡潔な説明にとどめている。なお、各先行研究の冒頭に付した(a)～(w)の記号は、筆者が刊行の旧いものから順に便宜的に付したものである。

### 二一一 高島流砲術を中心とした研究

高島流砲術と範致の研究には、「高島流砲術の指導者・伝播」という視点からと、「範致が門弟に授けた伝書」の研究

があげられる。前者に属する研究として七件 (a)～(g)、後者に属する研究として二件 (h)・(i)、また、資料館等で開催された展示関連の資料二点 (j)・(k) も紹介する。

◇「高島流砲術の指導者・伝播」という視点

(a) 岩崎鐵志 (一九六六) 「村上範致の西洋流砲術」<sup>(5)</sup>

嘉永六年のペリー来航を一つの起点ととらえ、嘉永六年までの行動に注目し、関連する文書に散見する範致像、門人帖<sup>(6)</sup>に挙げられた人々の略歴等をまとめ、「西洋砲術に関する業績により、藩内外の声望を獲得しあわせて藩政に参加する彼の地位を決定づける過程でもあった」(九八頁)と評価している。

(b) 岩崎 (一九六九) 「下曽根信敦の書簡―田原藩村上範致へ―」<sup>(7)</sup>

下曽根信敦<sup>(8)</sup>から範致へ送られた書翰は、下曽根が村上に、下曽根の弟子小川八兵衛を田原において指導をうけさせてほしいという依頼の内容で、当時の幕府の体制と動向を照らし合わせて紹介し、範致が高島流砲術家としての地位を確立する時の始まりを示す(九八頁)ものであると位置付けた。

(c) 岩崎 (一九七〇) 「高島流砲術伝播の研究―村上定平の書翰―」<sup>(9)</sup>

金沢市立図書館蔵の河野文庫に所蔵されている範致から河野久太郎宛の書簡と、田原藩土上田喜平および河辺磯吉から河野への書簡、範致の悴周助からの書簡の翻刻を掲載している。これらは、次にあげる高島流砲術伝播の研究の基礎史料となったものである。

(d)岩崎（一九七八）「高島流砲術伝播の研究―三河田原藩士村上定平を中心に―」<sup>10)</sup>  
 (e)岩崎（一九八二）「高島流砲術伝播の研究―三河田原藩士村上定平を中心に―」<sup>11)</sup>  
 範致が高島流砲術を指導した大槻竜之介と（仙台藩士）と伊達式部（仙台藩士）および斎藤三九郎（金沢藩士）と河野久太郎をとりあげ、その指導内容が散見される書翰などを根拠に、範致による高島流砲術伝播の実状を紹介した。いわば僻地の田原に住む村上に師事したことは当時の村上の名声を証拠付けるもの（岩崎一九八二…一五頁）とし評価している。

(f)岩崎（一九八五）「八木剛助筆録『田原紀聞』」<sup>12)</sup>  
 八木剛助（上田藩士）が記録したもので、範致の指導内容がわかるものとして、『田原紀聞』を翻刻し、紹介している。

(g)梶輝行（一九九七）「高島流砲術の形成過程とその展開―高島秋帆による人的交流・物的交流の諸相―」<sup>13)</sup>  
 高嶋流砲術の伝播の中で、範致も情報ネットワークの形成に関わり、梶は、高島流の全国的な普及のルートの一つとして、「三河田原藩の村上定平ルート」（二二八頁）と称し、普及の加速化に貢献したと評価している。

◇高島流砲術の伝書研究の中に見られる範致の評価

(h)梶（一九九四）「洋兵開基」高島秋帆軍事技術研究」<sup>14)</sup>  
 高島流砲術が伝授された際、門弟に授けられた複数の伝書を調査し、範致の伝書は、「誤写は認められず、また表現も直訳的な硬い状態から平易に改められたものとなっている（一三二頁）」と分析している。

(i) 梶（一九九五）「高島流砲術の『伝書』について」<sup>(15)</sup>  
高島流砲術の『伝書』の形成過程とその種類をまとめ、「村上定平系『伝書』は錯丁が認められず、訳文も整理したものの（七頁）」とし、「3巻3冊本長崎伝系完結本『伝書』（一一頁）」と分類し、また、「たいへん柔軟な姿勢でなされたもの（一二頁）」と見ている。

◇砲術関連の展示の図説資料

(j) 細井義雄（一九九五）「幕末期における三河の砲術とその動向―富田牧太の手控より―」<sup>(16)</sup>  
岡崎藩に西洋砲術を取り入れた長尾家の資料を中心に紹介した展示の図説資料の中で、三河における西洋流砲術の導入は田原藩が最初で、これには範致の貢献があったことを紹介している。

(k) 鈴木利昌（二〇〇七）「村上範致と西洋流砲術」<sup>(17)</sup>  
砲術伝書をテーマとした展示の図説資料で、範致の略歴を紹介し、田原藩における西洋流砲術の導入には範致が大きく貢献したことを紹介している。

二二二 田原藩の軍事・兵制・海防政策と範致について

田原藩の軍事・兵制・海防政策に関連する先行研究として以下四件（①～④）を紹介する。

(1) 田原町文化財調査会編（一九七五）「蘭学研究と軍備の様式化」、「西洋流軍備の充実」（『田原町史 中巻』所収）<sup>(18)</sup>  
範致が田原藩の軍制を西洋流へ改革した過程から範致が中心となり実施した内容（海岸防備操練・兵制の改革他）について、各種史料に基づき紹介している。

(m)増山禎之(一九九五)「三河国田原藩における西洋砲術―その受容の実態と課題―」<sup>(19)</sup>

田原藩における高島流の砲術の導入について砲弾鑄型、砲彈資料、砲台等を通して紹介し、これには明らかに範致の貢献があったことを指摘している。しかしながら、その受容実態は、範致が満足するようなものではなかったのではないかと述べている。また、範致については、西洋流砲術家としての功績の大きさに比べ不分明な点が多く、田原藩における西洋流砲術の実態も同様とし、これについての新史料の発見とその調査分析を課題としている。

(n)増山(一九九六)「渥美半島の海岸防備施設(概報)」<sup>(20)</sup>

近世から幕末にかけての渥美半島の海防設備(遠見番所、砲台、のろし台)について調査し、「天保十三年から十四年を境に、海岸防備は積極的な改革によって大きく変容し(中略)村上定平が中心に先導したことは間違いない(一〇九頁)」と述べ、評価している。

(o)増山(二〇〇六)「史料紹介『村上範致大砲打方試演書留』(その1)」<sup>(21)</sup>

標題の史料の翻刻を掲載し、田原藩における西洋砲術の習熟度、軍事の実態がわかる重要な資料と位置付けて紹介している。

## 二二三 その他の分野について

ここでは、「高島流砲術」および「田原藩の軍事・兵制・海防政策」に分類されない先行研究(p)～(w)をまとめる。

◇「藩政」に関する研究

(p)岩崎（一九六二）「幕末における田原藩の財政復興計画」<sup>22</sup>

田原藩は、大船（順王丸）を建造し、国内交易（蝦夷地交易計画等）により藩財政の窮迫を打開することをめざすが、この試みは藩の財政復興策として先駆的な取り組みであったと評価し、これを指揮したのが範致であることを紹介している。

(q)田原町文化財調査会編（一九七五）「蝦夷地交易と順王丸の建造」（『田原町史 中巻』所収）<sup>23</sup>

海防用軍船と蝦夷地開拓輸送船とを兼ねた大型船の建造の経緯から、交易の内容までを掲載し、範致の功績に触れている。

(r)田原町文化財調査会編（一九七五）「激動の時世と田原藩」（『田原町史 中巻』所収）<sup>24</sup>

(s)田原町文化財保護審議会・田原町史編さん委員会編（一九七八）「近代初期の田原」（『田原町史 下巻』所収）<sup>25</sup>

大政奉還から明治政府の設立、廢藩までの藩の歴史を紹介し、この間の範致は、家老職から田原藩大参事に役職名を更められ、藩の指揮を執ったことが紹介されている。

◇渡辺崋山（一七九三～一八四一）<sup>26</sup>の研究における「崋山の範致に対する評価」

(t)佐藤昌介（一九六四）「蚕社の人々」（『洋楽史研究序論』所収）<sup>27</sup>

崋山との関係で、範致を「第五類 田原藩関係者」にあげ、「藩政の側面において崋山の遺志を継承したもの」（二〇〇八頁）と評価している。

(u)岩崎（一九六六）「村上範致の西洋流砲術」<sup>(28)</sup>

崋山が三宅友信<sup>(29)</sup>へ宛てた書簡に、「定平事範致はスチデントンプロヘツソーレンの如きものか」と言い、次いで、『ソルダート終わりては遺憾』とした。即ち、彼は西洋流砲術に関して、『学生指導教授』の立場にあり、期待されていた<sup>(30)</sup>と評価している。また、『日本一の武家と相成候積三御座候』と囑望した<sup>(31)</sup>と、評価している。

(v)鵜飼尚代・佐久間永子（二〇一八）<sup>(32)</sup>

崋山の書簡から、崋山が範致の才能を認め、西洋兵学の知識を吸収して兵学の第一人者となることを期待していたこと、崋山の範致に対する信頼は非常に厚かったこと、三宅友信との関係の深さなどを指摘している。

(w)田原町文化財調査会編（一九七五）「村上範致」（『田原町史 中巻』所収）<sup>(33)</sup>  
 範致の出生から初出仕、藩内外における功績をまとめている。

## 二一四 先行研究における範致の評価と本研究の課題

ここまで範致に関連する研究を三つの分野に分けて紹介したが、これまでの研究における範致の評価は以下のとおりである。

1. 藩内外における高島流砲術の指導・伝播において、中心的な役割を担った人物の一人である。このことが認められ、藩政にも参画することとなる。
2. 藩政では、軍制を西洋流へ改革し、海防政策の指揮を執る。財政の復興政策では、蝦夷地交易計画等を試み当時としては先駆的な取り組みをした。



3. 幕藩体制の末期から明治政府が設立され廃藩に至るまで、藩政のトップとなり指揮を執った。
4. 崑山が範致の才能を認め、西洋兵学の知識を吸収して兵学の第一人者となることを期待しており、崑山、友信などの範致に対する信頼は非常に厚かった。

これらから、範致は、高島流砲術や西洋流砲術研究での地位は1のとおり確立されており、田原藩においても軍備・海防政策など中心的な役割を担ったことがわかる。しかしながら、1に比べ2、3の研究は少ない。増山（一九九五）は、範致について、「西洋砲術家としての功績に比べ不分明な点が多い、田原藩への西洋流砲術の実態も同様である（三四頁）」と指摘している。『田原町史 中巻』『同下巻』における田原藩史における範致の功績は見られるが、増山（二〇〇六）以降、範致に特化した新たな研究成果は見られないようである。

村上範致古記録研究会で研究対象としている「村上範致聞見雑記」は、範致が一人として収集した情報を記録したもので、備忘録のようなものである。何を考え、何を目指し記録したのか。記録した年代は、全国的に砲術家としての地位を確固たるものとした後、藩政の指揮を執り、新たな時代へ向かって行く頃である。先行研究には、この時代の範致に焦点をあてたものは少ない。砲術や兵制に限らず、国内の政情や外国事情等さまざまな方面に目を配る範致の姿を見ることができるとはならないか。「村上範致聞見雑記」の研究は、この点で、範致研究の一助になるものと考えられる。

### 三 目次項目

「村上範致聞見雑記」の内容を概観するため、「村上範致と著述古記録に関する基礎研究」において、目次項目をあげ一覧とした。本稿では、その続きとなる「安政五戊午聞見雑記五」から「万延元庚申聞見雑記七」までの目次項目を掲

載する。「目次項目」は以下の凡例に従って作成した。

〔凡例〕

- 一 「村上範致聞見雜記」に見出しが付されている場合は、その見出しを用いる。
- 一 他者の「咄」、「風聞」「噂」などについては、同時に得た情報であっても情報ごとに目次項目に加える。
- 一 項目の語としては、「村上範致聞見雜記」中の語をできる限り用い、長くなりすぎないようにまとめる。
- 一 漢字は常用漢字を用い、現代仮名遣いで表記するが、送り仮名については原文に従う。
- 一 目次項目の上に、便宜的に各冊通し番号を付す。
- 一 記事に村上範致が自身の見解を加筆している場合、記事の書き方に従い、(愚案あり)(致曰あり)等と付した。特に断りなく見解を加筆している場合は(コメントあり)と付した。

目次項目一覧

安政五戊午聞見雜記五	5	下田奉行へ口達の覚
1 外国事情風聞	6	亜墨利加官吏対話の記(二十九件)
2 備中守書	7	亜国官吏対話(十八件)
3 英人広東焼払一条書取評儀書付	8	信濃守・出羽守亜国官吏へ及対話趣(十件)
4 亜墨利加官吏引合及旨井上信濃守申上書付	9	私共亜国官吏へ応接趣(十八件)
	10	亜墨利加使節拝礼口上の趣、和解

- 11 亜墨利加国より差上書翰、和解 献上品目録
- 12 堀田備中守上京関連(二条)
- 13 阿蘭陀カヒタン兼領事官の江戸下向
- 14 アメリカコンシユールと和蘭領事館との出会
- 15 堀田閣老狂歌など
- 16 林大学頭・津田半左衛門上京
- 17 近衛殿より細川侯への早飛脚
- 18 真船忠蔵より書状
- 19 異国船三艘金川へ乗込
- 20 御養君御対顔
- 21 人事異動
- 22 アメリカコンシユールへ条約調印済
- 23 魯西亜使節金川へ着府
- 24 唐国戦争の現況
- 25 英吉利船台場へ乗入
- 26 魯西亜応接
- 27 英吉利西使節趣意
- 28 御本丸様急症の趣
- 29 若年寄本郷丹波守・奥医師岡桂心院の処分
- 30 英吉利・亜船乗入
- 31 魯西亜人・亜墨加人騎馬で遊乗
- 32 魯西亜人十二人屋敷前通行
- 33 達覚
- 34 英吉利人太田侯へ罷出
- 35 京地より差越書面の写(三件)
- 36 堀田備中守上京し、関白尋問の書付(四件)
- 37 堂上方献儀
- 38 近衛左大臣ら列座、備中守へ渡
- 39 魯西亜人登城
- 40 英吉人御台場へ上陸
- 41 大老井伊侯が鉄砲を打懸られる
- 42 公家衆より献言の写(三件)
- 43 伊豆辺で英吉利人と異人のいさかい
- 44 薩州浜で英吉利人との戦争
- 45 御席達封書写
- 46 触面達
- 47 間部侯上京の遅延
- 48 政府より外国へ航海仰付あるか

- 49 細川越中守家臣の刃傷沙汰
- 50 新製菓子屋の引札
- 51 京都の新話
- 52 仏蘭西軍艦入津
- 53 仏蘭西軍艦乗組の使節の宿所
- 54 彗星現れる
- 55 長州下屋敷を上屋敷に
- 56 外夷交易不相成
- 57 亜墨利加国へ本定約取替のため出立仰付
- 58 支那国でキリスの教普及
- 59 仏蘭西人の外観感想
- 60 亜墨利加へ出立の儀
- 61 大学八条目詠歌
- 62 水府の騒動
- 63 京師より噂
- 64 コレラの流行
- 65 箱館在任の仁より文通の写(四件)
- 66 水府の騒動で他国より人数馳走
- 67 京都町奉行より石谷因幡守役所へ引渡
- 68 江戸へ京都よりの凶人
- 69 英吉利船一艘品川入津
- 70 開港場での商売について仰出
- 71 英吉利船の退帆
- 72 異国船三艘来港
- 73 公儀触面写
- 74 龍出伊達屋敷手入れ
- 75 清朝からの申越
- 76 京師よりの凶人警固
- 77 当春箱館下りの公儀軍船の目的
- 78 墨利と英吉が近海で接戦
- 79 蝦夷婦人讃辞
- 80 魯西亞フウチヤチンの軍船損、長崎へ入港
- 81 和蘭との諍い
- 82 伊達伊予守暇願
- 83 沙汰書
- 84 井伊大老と太田閣老との争論
- 85 幕府君の御戯れ
- 86 当節英名慷慨と評判の諸侯

- 87 天竺船来る
- 88 松平備後守暇願
- 89 板倉周防守御免仰出
- 90 佐々木信濃守御役御免
- 91 金川へ諸芸講武所出来
- 92 魯西亜・英吉のミニストルの暮らしぶり
- 93 銃ミケールケウユールの性能
- 安政六己未聞見雜記六
- 1 大綱の遊楼出来
- 2 スクーネル船の製造
- 3 講武所の規則整備
- 4 上方よりの文通調書
- 5 仕立職人の痴情殺人
- 6 神奈川港への出店訴訟
- 7 間部下総守帰府
- 8 間部下総守京都使の褒美
- 9 下田上船問屋より文通（愚按あり）
- 10 神奈川地割書（愚按あり）
- 11 京師凶人の吟味
- 12 水府関係大名の参府なし
- 13 尚又京師より凶人
- 14 彦根みよりの昇進拔擢
- 15 京師の様子
- 16 京師凶人諸侯へ御預け
- 17 堂上方次男と偽り詐欺
- 18 武士と水主との船中での口論
- 19 永井玄蕃頭軍艦奉行仰付
- 20 土州侯家督相続の内意
- 21 仙台侯製造の異国形大軍艦の不手際
- 22 仙台で水府の郷土直訴
- 23 アメリカへの使節派遣の中止
- 24 異国との交易状況と影響
- 25 水野出羽守側用人仰付
- 26 間部閣老京師より着府
- 27 尚京師より凶人
- 28 異国船との交易品の直段

- 29 水府公一族の扱い
- 30 評定所吟味の噂
- 31 牧野越中守領内産出の石炭を金川で交易
- 32 松平伯耆守の京師凶人吟味
- 33 先年諸侯へ国勝手の者出来仰出
- 34 井伊侯の無礼を將軍指摘
- 35 諸侯国産の献上物御覧
- 36 遠馬の儀(コメントあり)
- 37 元諸与力上坐鈴木藤吉磔罪仰付
- 38 巷談 世の中請けに入り不の字尽し
- 39 能番組
- 40 越中島より出る苗売
- 41 和蘭船品川へ入津
- 42 異国人の買い物
- 43 神奈川台場築建の引請人なし
- 44 水府家老安嶋帯刀御預け
- 45 京師よりの僧兩人揚屋入り
- 46 長崎の現況
- 47 水府家来会沢猪大夫評定所へ呼出
- 48 京師凶人評定所で反発
- 49 勝麟太郎神奈川台場掛仰付
- 50 長崎奉行川村対馬守、魯西亜国使フーチャチンと交易物取替談判
- 51 英船持ち込みの中国産米と人參は売れず
- 52 水府老公公達片付け
- 53 讃州より水戸当主説得
- 54 和蘭人の不服など
- 55 薩州の台場修補
- 56 幕府直参への不満
- 57 金川交易場の普請関連
- 58 兵制の復古
- 59 東照宮参拝の一部旗本批判
- 60 彦根・鯖江・新宮・掛川の諸侯
- 61 勝麟太郎ら三人のみ勉強
- 62 講武兵勢改革中止
- 63 幕府の古復政策
- 64 各地港における夷人の状況
- 65 神奈川貿易場商人出店

- 66 北越の米価高価（致案あり）
- 67 範致、勝麟太郎に面会
- 68 講武所兵制の事（致案あり）
- 69 本所で御家人による殺人
- 70 麴町での殺人
- 71 本所辺旗本嫡子の狼藉
- 72 牛込ドンド橋先の死体
- 73 水戸罷出る人数
- 74 京師高貴の堂上方へ入道仰付
- 75 水藩千根某も御預け
- 76 水戸の僧侶強訴
- 77 間閣老に権力集中
- 78 天候不順の蚕への影響（愚按あり）
- 79 一ヶ谷の追いはぎ
- 80 貨幣改鑄の触
- 81 保字小判・壹歩判の停止
- 82 交易における諸外国の貨幣の扱い
- 83 赤羽根橋手前に異人館出来
- 84 範致同行の順助の災難
- 85 浅草鳥越で鳶の者大勢喧嘩
- 86 本郷辺でも夜行は慎むべし
- 87 英吉利船品川へ入津
- 88 百姓・町人共衣服・冠物
- 89 新金銀通用初まる
- 90 神奈川・長崎・箱館で交易商売勝手次第
- 91 夷国人制禁の品々
- 92 信州飯田堀侯定府家来、在所勝手仰付
- 93 水戸の動乱による水戸士民の動き
- 94 日光宮様、公家の預りを断る
- 95 神奈川交易開始
- 96 芝仮舎異人館
- 97 内外の事多く、営中も騒々し（愚按あり）
- 98 神奈川貿易の状況
- 99 神奈川港に關し間部閣老達
- 100 横浜交易場の状況
- 101 魯西亜人・英吉人参府
- 102 貿易場での商売
- 103 夷人より持参の錢至て悪性

- 104 外夷人頼りに時計を求めろ
- 105 夷人共婦人を召連
- 106 英吉人は蕃書調所に住みたいと申出
- 107 新たに二カ国が貿易に加わるか（愚按あり）
- 108 羽倉外記と墨夷人との騒動
- 109 吉田大五郎吟味
- 110 芝大前町、愛宕下で竜巻
- 111 横浜交易に諸侯も出店
- 112 絹糸不足で西陣と紺屋の申合
- 113 夷船二艘富津洲で座礁
- 114 英夷が湯屋で騒動
- 115 ミニストルとは
- 116 久貝因幡守屋敷の珍事
- 117 神奈川港での商売
- 118 日本の評判
- 119 為替相場
- 120 貿易品の当たり、はずれ
- 121 夷人と米飯
- 122 （異国）船の上官の買妓
- 123 芝居小屋や夷婦遊女町出来
- 124 金川宿在留墨夷虚無寺で騒動
- 125 旗本二、三男が慰みに切害
- 126 赤羽橋付近で物騒な体験
- 127 鈴木藤吉の死
- 128 薩摩の士が夷人に言いがかり
- 129 内藤豊州御用召
- 130 和蘭献上の武器
- 131 諸蛮持渡の品
- 132 京師・水府等に閹老も困り果てる
- 133 五カ国の船の積越品過剰
- 134 夷人の我侷 夷人付同心の鼻貞
- 135 長崎で品々窮乏
- 136 紙・米・絹類の価格高騰（愚案あり）
- 137 横浜貿易場の様子
- 138 大山参りで船混雑
- 139 日本品不足
- 140 新二朱金の不評
- 141 金吹替へと貿易の不評



- 142 魯西亜軍艦品川へ入津
- 143 交易に関わる人事
- 144 日本に対する異国の不信
- 145 大村侯の在府をめぐる工夫
- 146 唐太をめぐる魯西亜の動き（範致案あり）
- 147 横浜貿易場での決済
- 148 品川沖魯西亜船祝放
- 149 呉服橋外通行中の夷人に石を打付
- 150 掛川侯御役御免
- 151 間部様より触面
- 152 魯西亜船品川入津の事情
- 153 魯西亜人四百人程上陸
- 154 疾風雨中上陸した夷人らの状況
- 155 魯西亜船上で若年寄条約について対談
- 156 神奈川交易長くは保ちまじ
- 157 幕府より船備鉄造大砲鑄造の命
- 158 夷人も段々皇朝の言語に通ず
- 159 魯西亜人間部閣老館に迎接
- 160 横浜で夷人三人切害
- 161 新橋で夷人白昼に殺害される
- 162 夷人の千部経読見物
- 163 箱館での夷人と皇国人の喧嘩
- 164 蒸気船品川へ入津
- 165 水戸前中納言蟄居の命
- 166 水戸中納言差扣の命
- 167 水戸重臣裁許の次第
- 168 水戸裁許につき殿様も登城
- 169 水戸家来や領分の者共の動き
- 170 夜中まで衆人徘徊
- 171 水府へ仰渡の様子
- 172 人事の沙汰書
- 173 御役御免
- 174 各地の洪水
- 175 唐太の管轄
- 176 井伊公鎖細の下情にも通達
- 177 水府老公国元へ引移
- 178 安嶋帯刀送致の状況
- 179 北町奉行所へ夜盗入込

- 180 大佐竹侯の上屋敷へ盗賊引込
- 181 水戸騒動手当の七諸侯迷惑
- 182 佐渡金山の金産出せず
- 183 水府裁許の残り
- 184 宇和嶋の不服
- 185 洋銀吹直しの新銀
- 186 仙台出来の当百銭
- 187 洋銀・和銀の混用
- 188 米屋株仲間へ払米の達
- 189 堀田備中守隠居（私曰あり）
- 190 松平原七郎新規切米、小普請入
- 191 松平和泉守から生駒徳太郎へ達
- 192 水戸家来萱根伊予之助御預け
- 193 勢州一志郡高野村神明神主谷対馬御預け
- 194 神田の伊三郎主人等を傷害
- 195 大河原廉次郎乱心自殺
- 196 橋本左内ら諸侯へ御預け
- 197 芸者駒吉御預け
- 198 西洋砲術遠国不時教諭について
- 199 諸々御用掛り人事（愚按あり）
- 200 水戸家老衆へ
- 201 日光門跡から水戸について書付
- 202 流行千両幟の文句
- 203 板倉周防・佐々木信濃御免についての歌
- 204 棒金掘出しの説
- 205 於京都御落鮓
- 206 松平讃岐守らへ申渡書付
- 207 三国無双井伊妙薬掃部散
- 208 府内銭相場
- 209 外国応接の事甚だ混雑
- 210 絞り木綿アメリカで五万端受注
- 211 江戸城にうるんもの紛入る
- 212 横浜で魯西亜人殺害
- 213 品川で旗本夷人を切り捨
- 214 神田祭の日、夷人上陸
- 215 間部閣老表門柱の落書
- 216 閣老内藤氏門の張紙
- 217 池内大学詩

- 218 来造酒三郎獄中作
- 219 小笠原若狭守御役御免
- 220 水府連枝差扣
- 221 登城の奉書の至来方の変化
- 222 銅銭不足、幕府へ引上げ
- 223 銭相場頻りに高下
- 224 酒井雅楽頭品川二ノ台場預り仰付
- 225 魯西亜より蝦夷地に関し申立て
- 226 人事等の沙汰書
- 227 中村安之丞英吉船を買い、鯨漁仰付
- 228 水府公一条落着間近か
- 229 金川で魯西亜水夫切り殺される
- 230 品川碇泊の仏蘭船祝砲の達
- 231 魯西船申立て三カ条（愚按あり）
- 232 横浜貿易は諸国甚不承知
- 233 南海無人島につき英吉利申出
- 234 箱館夷人貿易品
- 235 上州・総州・秩父・美濃路の大水
- 236 品川沖へ仏蘭西船壹艘入津
- 237 伏見奉行内藤豊後守雁間席へ
- 238 浅草観音でアメリカ人買い物
- 239 長崎蘭館焼失
- 240 蘭人の申立、一切取揚げず
- 241 鈴木藤吉未だ吟味中
- 242 立花出雲守石炭献上
- 243 岡部様預り堂上方凶人の警固
- 244 評定所留役手嶋十三郎切害される
- 245 水戸当主より臣へ罪科仰出
- 246 京都凶人等の裁許
- 247 アメリカミニストル登城
- 248 志州英虞郡波切村百姓仙右衛門
- 249 仙右衛門三室戸三位息女預り（私曰あり）
- 250 座右用途五千両遣わされる
- 251 撰家等へ金式万両
- 252 関白九條殿加増
- 253 広橋前大納言へ白銀五十枚
- 254 金川で仏蘭西カピタン召仕の南京人殺害される
- 255 夷人、当地の辞で値段掛引

## 万延元庚申聞見雜録 七

- 256 本丸炎上
- 257 御用廻状
- 258 御用廻状(諸願・諸伺につき)
- 259 本丸炎上で書記類大抵焼失
- 260 西丸御殿畳なし
- 261 炎上の節の警固
- 262 炎上三、四日以前の不思議な事
- 263 外国掛りより尋の時務策
- 264 炎上火元不分明
- 265 炎上に関わる裁許
- 266 酒井左衛門尉より異国形船の問合せ
- 267 仙台佐竹より蝦地に付申立
- 268 諸家朱印の写炎上焼失
- 269 異国人切害される
- 270 十月廿七日人事異動
- 271 十月廿八日人事異動
- 272 亜墨利加人の金を盗んだ盗人の召捕り
- 1 三田聖坂辺で英吉人壱人殺害される
- 2 蝦夷地配渡の諸大名
- 3 尾張藩関係者切殺される
- 4 英人小荷駄馬でも買入
- 5 和蘭陀人兩人殺害される
- 6 南京人が英館から金盗む
- 7 夷人の大騒ぎ、後始末
- 8 水戸藩と幕府中枢との関わり
- 9 亜墨利加船襲撃される
- 10 元老水戸を忌み嫌う
- 11 講武所調練の変化 金銀貨相場の乱高下
- 12 蝦夷地配渡の諸侯想定外の喜び
- 13 異人日本の馬を銃殺
- 14 清朝と英異と弥戦争
- 15 皇国貿易三港の繁昌順位
- 16 長崎近辺の諸物価高(愚案あり)
- 17 横浜蘭人殺害の下手人

- 18 襲撃されたアメリカ船は八丈嶋に留まる
- 19 横浜での蘭人殺害に関しハルリス申立
- 20 清朝人酔て道路に倒臥、英の銃隊出動
- 21 紀州産英吉人伝吉、殺害以前
- 22 水府裁許
- 23 水戸専権大夫殺害される
- 24 水戸表尚又騒がし
- 25 水戸歴々の士の出奔
- 26 横浜田川より庸輔へ手紙
- 27 水府への仕向は無理
- 28 安政七年三月三日外桜田騒動（六件）
- 29 昨日喧嘩で町人壺人切られる
- 30 細川越中守家来が桜田門外の騒動を最初に伝える
- 31 金芝堀老公へ桜田門外の騒動を報告
- 32 井伊侯引取の様子
- 33 桜田門外の騒動関連（三件）
- 34 当日諸侯の様子
- 35 井伊侯国元へ早打
- 36 細川越中守屋敷前辻番所
- 37 直弼の首は酒井雅楽頭辻番所へ
- 38 加害水戸藩士の姓名（私曰あり）
- 39 井伊家家臣大疵で死す
- 40 首は刀番某の首と申触れる
- 41 当日直弼の駕籠かき陸尺の咄（愚案あり）
- 42 幕府嚴重警備
- 43 幕府中枢の供人数増加
- 44 丸の内通りぬけ禁止
- 45 井伊家にて死亡の敵方手負い人は薩摩藩士か
- 46 生還した井伊家供自殺（愚案あり）
- 47 桜田門外での井伊家死傷者届出（愚案あり）
- 48 外桜田に居屋敷のある上杉家からの届
- 49 細川越中守への達
- 50 死去した佐野竹之助の引渡
- 51 昼夜共嚴重警備をするよう留守居廻状（愚案あり）
- 52 曲輪内非常の手当申付
- 53 井伊掃部頭へ沙汰書
- 54 幕府役人の身辺に怪しい人物
- 55 町人体の者が切られる

- 56 三日騒動狼藉の人数
- 57 水府で多人数集り、大小砲持ち大騒ぎ(愚案あり)
- 58 死体見聞のメモカ
- 59 水戸騒動の趣聞書
- 60 出府の水戸家老雑賀孫市突留められる
- 61 農兵集合の沙汰
- 62 騒動鎮圧についての指示
- 63 水戸藩家臣の出奔
- 64 首持参の件、遠藤但馬守届
- 65 三月三日外桜田騒動に付、諸向届
- 66 三月三日掃部頭家来への達
- 67 三月四日御用番内藤様へ願書
- 68 三月三日八代渕河岸からの届
- 69 三月三日日比谷門からの届
- 70 三月三日馬場先門からの届
- 71 三月三日八代渕河岸辻番所からの届
- 72 三月三日龍之口酒井雅楽頭辻番所からの届
- 73 預替
- 74 内藤家家中へ達
- 75 残党につき三月十一日触面
- 76 昼夜見廻りにつき三月十日触面
- 77 通行止めにつき三月九日触面
- 78 老中・若年寄供廻り増人
- 79 外桜田門等の通行
- 80 彦根藩の江戸屋敷の状況
- 81 異変の節の出張
- 82 細川家・脇坂家へ欠込み水戸浪人預替
- 83 彦根方即死人と手負人
- 84 公儀触面
- 85 水戸・彦根に関する世評記
- 86 水戸当中納言自殺
- 87 外桜田一件で預けの衆、町奉行所で吟味
- 88 町人体の者の咄
- 89 会津侯御召出府
- 90 彦根藩士の大難渋
- 91 元水戸藩士佐野竹次郎
- 92 多川への出入
- 93 英吉利国ミニストルの申出(愚意あり)

- 94 また英吉利国ミニストルの申出（愚案あり）
- 95 外桜田一件聞書（二件）
- 96 三月三日紀伊守宅で家来へ仰渡
- 97 掃部頭首の切り離し
- 98 御しるし引渡し
- 99 外桜田門での若い供や中間の働き
- 100 首の様子
- 101 水戸物頭兩人出奔
- 102 遠藤家屋敷に首と死に損ねた者とがかき込
- 103 世田ヶ谷領新町村百姓の話
- 104 三月八日井伊掃部頭へ
- 105 菅沼新八郎家来預かり宮田瀬兵衛
- 106 三月六日掃部頭家来へ達書取
- 107 三月十一日松平大隅守差扣の伺
- 108 三月十一日松平但馬守差扣の伺
- 109 三月十一日片桐石見守差扣の伺
- 110 三月十一日戸田七之助差扣の伺
- 111 片桐石見守、戸田七之助家来へ達
- 112 三月廿一日柳沢民部少輔差扣の伺
- 113 細川様より伺（四件）
- 114 細川越中守へ達
- 115 寺社奉行へ達
- 116 警固人数の申合
- 117 掃部頭息愛麻呂の件
- 118 三月三日大目付へ達
- 119 三月四日年寄衆登城・退出時の注意
- 120 三月三日夕、水戸城附より差出書面
- 121 戯作風聞
- 122 三月十六日田安門での出来事（愚按あり）
- 123 彦根家臣の動き
- 124 水藩士菊池幸蔵と慎助の話合（愚按あり）
- 125 井伊家での論説二等
- 126 幕府より水戸へ上使（愚按あり）
- 127 三月二日夜品川相模屋に薩州有村某揚がる
- 128 酒井・奥平両家より御用廻状
- 129 有村治左衛門兄も京で召捕、江戸で預け
- 130 細川家へ井伊家から要請
- 131 会津出府

- 132 水戸中納言へ登城遠慮の達
- 133 三御門の警固強化
- 134 松平大隅守・上杉様の足軽固め
- 135 久世大和守老中再勤
- 136 年号改元
- 137 外国奉行赤松左衛門尉情況
- 138 本所横川銅座商某と彦根藩との交わり
- 139 松平泉州侯御役御免
- 140 御用御側薬師御免
- 141 幕府、御家人への配慮
- 142 逃亡の水戸浪人捕押えの顛末
- 143 彦根侯、百姓式百人程を瀬田ヶ谷へ返す
- 144 井伊家へ差上げのかざり職人四人返されず
- 145 預りに人に付、新城藩より出府
- 146 外々の者の吟味
- 147 連の内、手疵を負う者
- 148 同類の浪士兩人召捕
- 149 講武所の大砲・小銃盗取られる
- 150 彦根家も兎角治まらず
- 151 井伊家・水戸家出奔者多数
- 152 水府上屋敷の用心
- 153 シイボルト皇国の条約に意見
- 154 清朝戦争又々英人敗る
- 155 英国と清朝の関係、皇国への影響
- 156 寺社奉行松平伯州侯引込
- 157 木曾路・奥羽道中追はぎ盗賊等夥敷徘徊
- 158 安政六年京都掛り一件(三拾八人口書)
- 159 三月六日江州彦根城下・京師の戦闘支度(愚按あり)
- 160 水府の人との問答(愚按あり)
- 161 浦賀・金川近海廻船の吟味甚厳
- 162 下野足利陣屋で乱妨(愚按あり)
- 163 八木財治の試み
- 164 安政七年三月三日杵築侯留守居の話(七件)
- 165 三月廿一日御館・殿中まで大騒
- 166 片桐石見守家臣切腹すべきか
- 167 片桐石見守、水府士預け替の経費
- 168 刀の長短(コメントあり)
- 169 水府浪人京師で九條家へ



- 170 政府官吏も吟味に当惑
- 171 預け人の世話
- 172 郭内の厳制・衛門の人数維持
- 173 高松侯も刺殺か
- 174 三月三日夜半水老公御国へ引取か
- 175 下馬外之侍
- 176 大悪（大学書拔）
- 177 戯歌一首
- 178 風説の写（十四件）
- 179 京師・大坂で狼藉の水府人、江戸で預替
- 180 浦賀海改厳しい
- 181 三月三日狼藉の十七人、二日夜のこと
- 182 閏三月晦日掃部頭病死の知らせ
- 183 水府人狼藉の趣意
- 184 長岡宿乱暴の節の標示
- 185 彦根家老木俣清左衛門差出書面
- 186 上方風説（九条）
- 187 水府後聞
- 188 都下風聞集（二条）
- 189 水戸中納言、家臣に向け御筆の文書
- 190 垂墨利加使節航海の報告
- 191 金川で士壱人酒狂
- 192 水府公への諭旨返上、水府への彦根問者
- 193 墨利国への使節、目的地到着
- 194 高田の馬場で与力切られる
- 195 都下戯談類集（六種）
- 196 鎖帷子大流行
- 197 京極様へ大関和一郎預け
- 198 勝麟太郎アメリカより観臨丸で着府
- 199 清朝戦争の来信（範致加朱解）
- 200 脇坂閣老引籠にて出勤せず（愚按あり）
- 201 水野土州在所で隠居の仰出
- 202 品川来舶のポルトガル人、近日登營
- 203 坪内権十郎と申す旗本
- 204 若年寄本多越中侯引込
- 205 加賀中納言老中方へ演説
- 206 金子徳四郎水戸へ構御免、館入
- 207 品川台場沖へフロイセンの大蒸気軍船

- 208 彦根で大風雨
- 209 昇平橋で町人殺害される
- 210 両国で虎の見せ物（予の見解あり）
- 211 異人も清英戦争の咄
- 212 清英戦争で唐国農商人民逃亡
- 213 水府老公出府
- 214 水戸へ御下しの勅詔返上
- 215 吉原道で若侍、人を殺害
- 216 箱館丸・保昌丸・長崎スクーネル等出帆後、強風
- 217 内藤紀伊守届書
- 218 水戸前中納言の容態
- 219 清英戦闘の事（致案あり）
- 220 芝薩州屋敷へ浪人三拾六人
- 221 水戸中納言、看病のため発駕の願
- 222 町在甚物騒
- 223 本願寺宗の寺へ夜盗
- 224 諸物価高値の元凶
- 225 牛込見附内で首縊りの婦人
- 226 矢来屋敷で首縊りの男子
- 227 北蝦夷地開拓筋御用
- 228 井伊愛麻呂人事
- 229 水戸中納言、水戸へ発駕
- 230 水戸前中納言、永蟄居御免
- 231 水戸前中納言逝去
- 232 浪人三十七人松平修理大夫屋敷で訴え（範致曰あり）
- 233 戸田采女正・左門へ褒美（範致按あり）
- 234 牛込門外で町人体の男殺される
- 235 戸田家褒美の続き
- 236 万延元年亜国新聞の記事（三件）
- 237 久貝因幡守、講武所惣裁兼役から異動
- 238 戸田七之助預かり水府浪人佐野竹之助の様子
- 239 薩州侯邸で三十六人の水府浪人訴え
- 240 尾張前中納言・徳川刑部卿隠居御免
- 241 水府人三十六人の上言
- 242 万次郎等夷船へ内分無刀で乗入
- 243 亜墨利加使節帰府
- 244 使節帰国の船
- 245 仏郎西新発明の利器（範致曰あり）

- 246 仏郎西製ノミニエゲエールの命中精度
- 247 倫敦新聞紙抄訳(範致コメントあり)
- 248 蘇州落城(範致コメントあり)
- 249 浪人共奉上の書付
- 250 英国新聞蕃書調所訳(愚按あり)
- 251 英吉利・仏郎西大清を伐つ(愚按あり)
- 252 支那海岸の各所強盜徘徊(範致按・範致曰あり)
- 253 亜墨利加使節、彼地逗留中の画図
- 254 小姓組衆と書院番衆との剣術試合(愚按あり)
- 255 亜墨利加における社会的弱者教育(愚按あり)
- 256 アメリカの芝居、織機
- 257 アメリカより幕府への献上品(愚按あり)
- 258 ホルトガル国の衰微
- 259 英夷の商人、雁を鉄砲で撃つ
- 260 索漏生船和信貿易を申立
- 261 皇国人夷人を剣撃、戦争開始か
- 262 亜国献上廿六連発銃
- 263 亜国より帰朝の宮津某の話(十一條)
- 264 索漏生船への返書
- 265 亜墨利加事務宰相への書翰
- 266 堀織部正自殺
- 267 丹波福知山百姓一揆の次第
- 268 福知山百姓一揆裁許
- 269 老中、預御免
- 270 酒井若狭守増高
- 271 アメリカ使節新見ら加増
- 272 安藤対馬守家中へ達
- 273 内藤紀伊守へ書付(私曰あり)
- 274 索漏生との和信条約をめぐる堀織部正自殺
- 275 ギャワ国も和信貿易を願出(愚按あり)
- 276 水府浪人群出
- 277 郭内へ怪敷者入込
- 278 諸役人の隠し供
- 279 閣老安藤侯門へ張札
- 280 横浜・品川等の異人館へ水府人打込の噂
- 281 神奈川表、胡乱の者の取締
- 282 外国人宿寺并赤羽根接遇所の取締
- 283 浦賀表警固強化

284	江戸中昼夜廻り強化	296	いさらこ長応寺の異人警衛
285	町奉行・火附盗賊改へ達	297	諸侯の異人警衛負担(致案あり)
286	異人宿寺の警固仰付	298	異人の無理解
287	町奉行・勘定奉行・火附盗賊改へ達	299	赤羽根辺で異人殺害さる
288	水戸家来六、七百人程忍出	300	蝦夷地開墾
289	東禅寺で乱妨人取押	301	房州勝山酒井侯領民蝦夷地へ渡海(愚案あり)
290	水府浪人多額の軍用金	302	本丸普請に付拝領
291	水戸浪人横浜表乱妨の趣風聞	303	和宮様下向
292	出火に付登城の節	304	白雉子献上
293	横浜異人警衛	305	アメリカ通弁官キウスケン殺害さる
294	何処となく騒敷	306	安藤侯・内藤侯の警固
295	華屋某と御用達千波太郎兵衛の揚屋入り	307	奉行竹内様の手腕

#### 四 おわりに

本稿では、「村上範致と著述古記録に関する基礎研究」に次いで、範致の基礎情報を整理・補足し、更に「安政五戊午聞見雑記五」から「万延元庚申聞見雑録七」までの目次項目案を作成した。

先行研究から、幕末における範致の立場を見るに、高島流砲術家として藩内外における中心的な役割を担った一人であること、これにより藩政においては軍事・海防政策の指揮をとり、また、交易による藩財政の改善案を提出し、その

後は藩の中心的な人物となったことを改めて確認することができた。一方、藩政を担って以降の範致の動向や砲術、海防政策についての研究は意外に少ないようである。

「村上範致聞見雑記」の「目次項目案」としては、紙面の関係上、三冊のみの掲載となったが、範致が江戸詰めとなる安政五年からの記録となり、その内容は、外国事情、海防、軍備、外国船の入津情報、蝦夷地事情、幕府や朝廷の動向に加え、水戸藩の事情も含まれて来ている。特に開国による日本社会の混乱についての情報、また安政七年（一八六〇）におきた桜田門外の変に関連する情報は大変多く、幕藩体制が維持困難になる経緯も史料的に跡付けできるのである。今後、研究会において、更に内容を読み進め、幕末における範致の視点をより詳細に考察していきたいと考えている。

## 【注】

- (1) 村上範致（一八〇八一—一八七二）幼名を喜之助といい、通称は定平、諱を初め貞輔といい、のちに範致、清谷と号する。のちに家名の財右衛門を襲名する。田原藩を西洋砲術へ改革し、下級藩士から、家老まで出世した。『田原町史 中巻』（田原町文化財調査会編、一九七五年）一〇七九—一〇八六頁
- (2) 村上範致古記録研究会。二〇一八年十月現在、秋元悦子、砂川亨、鵜飼尚代、黒川秀雄、佐久間永子、関善道、塚原美根子、仁田紀生、早川秋子、林由紀子、原知里、福田花子、堀尾裕真、吉川将（敬称略五十音順）の十四名で構成され、毎月一回輪読というペースで進めている。
- (3) 鵜飼尚代・佐久間永子「村上範致と著述古記録に関する基礎研究」（名古屋外国語大学論集 2号）名古屋外国語大学、二〇一八年）三〇—三二四頁
- (4) 高島流砲術 高島秋帆（一七九八—一八六八）が長崎の出島の蘭人から西洋砲術を学び、これを高島流砲術と呼んだ。『日本近世人名辞典』（竹内誠・深井雅海編、吉川弘文館、二〇〇五年）五四七頁
- (5) 岩崎鐵志「村上範致の西洋流砲術」（『蘭学資料研究会研究報告』復刻版、蘭学資料研究会、一九六六年）九三—一〇五頁

- (6) 岩崎（一九六〇）九三一九四頁、九八一〇四頁
- (7) 岩崎鐵志「下曾根信敦の書簡―田原藩村上範致へ―」（『日本歴史』<sup>28</sup>）、日本歴史学会編、一九六九年 九五九八頁
- (8) 下曾根信敦（一八〇六一―一八七四）金三郎。幕末の西洋砲術家。幕臣。天保十二年高島秋帆について西洋砲術を学び、葦山代官江川太郎左衛門について高島流砲術指南を許された。『日本近世人名辞典』（竹内誠・深井雅海編、吉川弘文館、二〇〇五年）四七二頁
- (9) 岩崎鐵志「高島流砲術伝播の研究―村上定平の書翰―」（『静岡女子短期大学研究紀要』16号、静岡女子短期大学、一九七〇年）六一―〇六頁
- (10) 岩崎鐵志「高島流砲術伝播の研究―三河田原藩土村上定平を中心に―」（『静岡女子短期大学研究紀要』25号、静岡女子短期大学、一九七八年）一一六頁
- (11) 岩崎鐵志「高島流砲術伝播の研究―三河田原藩土村上定平を中心に―」（『東アジアの科学』、吉田忠編、勁草書房、一九八二年）一〇九―一四六頁
- (12) 岩崎鐵志「八木剛助筆録『田原紀聞』」（『実学史研究Ⅱ』、実学資料研究会（代表末中哲夫）編、思文閣出版、一九八五年）二二二―二五二頁
- (13) 梶輝行「高島流砲術の形成過程とその展開―高島秋帆による人的交流・物的交流の諸相―」（『近世日本の海外情報』、岩下哲典・真栄平房昭編、岩田書院、一九九七年）二〇九―二三九頁
- (14) 梶輝行「『洋兵開基』高島秋帆軍事技術研究」（『高島秋帆 西洋砲術家の生涯と徳丸原』、板橋区立郷土資料館編、一九九四年）一二三―一三六頁
- (15) 梶輝行「高島流砲術の『伝書』について」（『集論高島秋帆』、板橋区立郷土資料館 小西雅徳編、一九九五年）一一六頁
- (16) 細井義雄「幕末期における三河の砲術とその動向―富田牧太の手控より―」（『岡崎藩長尾家と西洋砲術』、岡崎市、一九九五年）七一―〇七頁
- (17) 鈴木利昌「村上範致と西洋流砲術」（『江戸の砲術―砲術書から見たその歴史―』、板橋区立郷土資料館、二〇〇七年）一〇六一―一〇七頁
- (18) 『田原町史 中巻』六四二―七八七頁
- (19) 増山嶺之「三河国田原藩における西洋砲術―その受容の実態と課題―」（『集論高島秋帆』、板橋区立郷土資料館小西雅徳編、一九九五年）二二二―二七頁

(20) 増山禎之「渥美半島の海岸防備施設（概報）」（『愛城研報告』第3号、愛知中世城郭研究会、一九九六年）七三二—二〇頁  
(21) 増山禎之「史料紹介「村上範致大砲打方試演書留」（その1）」（『愛城研報告』第10号、愛知中世城郭研究会、二〇〇六年）一六一—一七六頁

(22) 岩崎鉄志「幕末における田原藩の財政復興計画」（『日本歴史』(7)、日本歴史学会編、一九六二年）七五—八二頁

(23) 『田原町史 中巻』七—八—七三四頁

(24) 『田原町史 中巻』七六〇—七八七頁

(25) 『田原町史 下巻』（田原町文化保護審議会・田原町史編さん委員会編、一九七八年）一—四八頁

(26) 渡辺崋山（一七九三—一八四一）田原藩士・家老。文人画家・蘭学者。江戸田原藩藩邸長屋に生まれる。名は定静。字は子安または伯登。通称は登。はじめ華山と号し、のち崋山と改める。海外事情を研究し、その成果を世に出すが、これが幕府の忌むところとなり、天保十年（一八三九）投獄され（蚕社の獄）、田原蟄居となり天保十二年（一八四一）田原で自刃する。『田原町史 中巻』、一〇四—二一〇—四頁、『日本近世人名辞典』、一一四—六頁

(27) 佐藤昌介『洋学史研究序説』（岩波書店、一九六四年）一九—二〇八頁

(28) 岩崎（一九六六）九三頁

(29) 三宅友信（一八〇六—一八八六）田原藩八代藩主康友の子として江戸麹町田原藩上屋敷で生まれる。十九歳の頃より、崋山の指導を受け蘭学の研究を行うようになる。他藩より持参金付の養子を迎えるため嫡廃となり、隠居身分となる。その隠居料にて蘭書を購入し、友信が居住した菓鴨屋敷には蘭書が充滿していたと言われる。『田原町史 中巻』一〇六—一〇七頁

(30) 岩崎（一九六六）は、崋山の書簡の原文を、「菓鴨公に贈りし書簡」（『崋山全集』、崋山叢書出版会、一九四一年）五四—六頁から引用している。

佐藤（一九六四）は、右の崋山の書簡を以下のとおり解釈している。

「定平（村上定平）事は、申さば、閣下（三宅友信）はコニフルシテイテンのプロヘツソーレンとやらにて、定平はスチデンテンプロヘツソーレンの如きものか（後略）」の解釈として、蘭語「コニフルシテイテン」は、koning staen（王国）、「プロヘツソーレン」は、professoren（教官）であり、また、「スチデンテン」とは、studenten（学生）である。（一九四頁）

なお佐藤昌介校注「渡辺崋山 三宅友信宛書簡」（『日本思想大系』55、岩波書店、一九七二）一一三頁に、「ソルダート」は、蘭語

soldat (兵卒) と注釈が付けられている。

(31) 岩崎(一九六六) 九八頁。この書簡の原文は、「真木重郎兵衛に贈りし書簡」、「崋山全集」、崋山叢書出版会、一九四一年、五七一頁を引用している。

(32) 鵜飼・佐久間(二〇一八) 三二五―三二二頁

(33) 『田原町史 中巻』一〇七九―一〇八六頁

(34) 『田原町史 中巻』一〇八四頁